

水面のきらめき・

水中の灯り

武田美保 シンクロスイマー

子供の頃から練習中心の生活で、ずっと水の中で過ごしていた。電気や灯りで思い浮かぶのも、やはりプールの光景だ。

二〇〇〇年シドニー。自分にとって二度目のオリンピック。その舞台に立った時、まばゆいばかりのライトに包まれた。日本チームへの声援の渦に後押しされて階段を上る。今こそ、これまでやってきたことをすべて出し切るのだ。心の底からゾクゾクして、夢に描いていたオリンピックそのものだと感じた。

シンクロナイズドスイミングには、チーム、デュエット、ソロなどがある。不調やプレッシャーに苦しむことがある一方で、「この演目は完全に自分のものにできた」という自信が得られることもある。シドニー大会チーム競技での空手をテーマにした演目が、まさにそうだった。「早く自分の演技を出したい!」と逸るほど、心も身体も完全に準備が整っていた。演技中の水中では、いつも以上に音楽がはっきり聞こえ、色彩もクリアに見えた。心身のコンディションがすべてうまく噛み合い、潜在能力まで発揮できたのかもしれない。一万人以上の観客、地響きのような歓声、明るいプールサイドに溢れるフラッシュの光。圧倒的な眩しさが心に刻まれている。

引退後、松任谷由実さんの「シャングリラ」というショーに参加させていただいた。水を使うショーで演技をするのだが、現役時代とは対照的に、暗闇の中、ピンスポットで円形のプールを泳ぐ。暗

でんき * STORY

くて何も見えず、回転すると方向もわからなくなる。そこで、三時、六時、九時、一二時の方向に、それぞれ違う色のライトをつけてもらった。「次は斜め左に行きたいから、三時方向に赤のライトが見えるように」——そんなふうにライトに導かれて水の中を進む。

思えば幼い頃、最初に意識した電気が「豆球」だった。暗闇が怖かったので、小さな灯りが点いているとホッとした。普段の生活でも小さな灯りに助けられていることを思い出したショーだった。

毎日一〇時間、水中で練習してきたが、昔は温水でないプールも多かった。水が冷たいと息が苦しく、痺れて感覚もなくなってくる。アスリートにとっての適温は二八℃。筋肉がピンと張って、動くほどよく温まる。プールの熱源も近頃は電気が増えていよう。

今は以前のようにふんだんに電気は使えないが、一度手に入れた快適な暮らしを手放すことは難しい。かといって、電気料金が上がるのも嬉しくない。八方塞がりかなとも感じるが、日本には技術の力がある。その力で、解決の道を示してほしい。

二〇二〇年、東京オリンピックという最高の舞台で、日本の技術を生かした素晴らしい灯りの表現・演出が見られることを楽しみにしている。

躍



たけだ みほ
シンクロスイマー

1976年京都市生まれ。5歳から水泳を始め、7歳でシンクロコースに転向。アトランタ、シドニー、アテネの3つのオリンピックで、銀・銅計5個のメダルを獲得。引退後、シンクロ解説やシンクロを用いたショーにも参加。講演、執筆でも活躍。三重大学特任教授。

<http://www.mihotakeda.net/>



©alamy/PPS